

## 悲しきインド

— 『キム』における非言語的ユートピアの解体 —

永 富 久 美

インドとイギリスの対立という非情なまでに自明の歴史的事実を絶対条件として成立する虚構空間の中で、イギリス人でありながらインド的な風土と言語環境に馴致されて育ったキムという少年の存在は、作者キプリングの伝記を想起するなら些かも特異と呼ぶにはあたらぬといえ、テキストが抱えもつ対立項の双方に必然的に関与することになる彼の造形は、あまりにも格好の批評的論題を提供してくれる。インドとイギリスの、一見明白すぎる対立は、両者間を揺れ動くキム少年によって宙吊りにされる一方、彼の言動の一つひとつが二国間の対立を宿命的に指し示してしまうという相互作用を孕んだ『キム』というテキストにおいては、キムの果たす役割の真の意味を見定めることが当然ながら要点となるだろう。はたしてキムの揺れは、両者間の差異を強調することに貢献しているのだろうか、あるいは差異を越えた繋がりを導くものであるのだろうか。

『キム』というテキストでは、インドとイギリスの対立はインドの圧倒的な前景化によって提示される。インドはキムにとって——あるいはこのテキスト自身にとってと言えるかもしれないが——イギリスよりも遙かに自然で馴染み深い存在である。そうしたインドの前景化は確かに、「インドは世界で唯一の民主的な国家である」<sup>10</sup>とか、「アジア人は敵の裏をかこうとしているときには、まばたきしないものである」(p.72)、「時間の観念のない東洋人にとっては、24時間いつをとっても同じであり、よって交通は然るべく規制されている」(p.74)といった真理を表す現在形の使用や、いかにもインドの香りの漂う風景や群衆の描写によって支えられているとはいえず、<sup>11</sup>それによってかえって背景にあるイギリスの優位性が引き立つということはなく、むしろイギリスの一枚岩的な硬直した思考や文化が強調されてしまうという点で、サイドのいうオリエンタリズムの定式は、ここでは上手く当てはまらないと考えられる

のである。少なくともこのテキストの前半部ではとりわけその印象が強い。それは例えばキムとラマ僧が旅の途中で初めてイギリス陣営と遭遇する場面において、典型的に見出すことができる。

「お師匠さま、このラクダ面した細っこい馬鹿野郎が、僕は白人の子供だと言ってます」

「だがどうして？」

「ああ、でもそれは本当です。生まれたときから知ってました。でもこいつがそれを知ったのは、僕の首からお守りをもぎ取って紙に書いてあることを読んだからです。あいつは白人に生まれた者はずっと白人[サーヒブ]のままだと思ってて、あいつら二人で僕をこの連隊に引き留めておくか、マドリッサー(学校)にやるかするつもりなんです……あの太った間抜け野郎どラクダみたいな奴とじゃ意見が違うんです。だからってどうってことないけど……」

「だが彼らに、お前は私の弟子なのだと話してみなさい。私の勇気がくじけ、途方にくれていたとき、どのようにお前が私のもとにやってきたか話してみなさい。私たちの探求の旅のことを話してみなさい。そうすれば彼らは今すぐお前を釈放してくれるだろう」  
「もう話しました。あいつらは笑って、警察をどうか言うんです」

「何を話しているんだ？」とベネット氏が問いかけた。  
「ああ、この方が言ってるのは、もしあんたたちが僕を釈放してくれないのなら、務めが中断してしまうって……」

「で、その務めとは一体何なのかね……」

「このお方がどうしても見つけたがってる川がこの国にあって、それは一本の矢が落ちた所で吹き出した川で——」キムは頭の中で土地の言葉をぎこちない英語に訳しかえながら、いらいらと足踏みした……

「もう一回言ってみろ」ベネット氏は言った。キムは

更に詳しく説明し直した。

「だがこれは途方もない冒瀆ではないか」と英国国教会のしもべなる者は声を上げた。

「残念だな」とヴィクター師は共感の意を表した。「土地の言葉が喋れたらいいのだが。全く、罪を洗い流す川だと!...だがこの老人と行かせるわけにはいかない。お前が兵士の息子でなかったら話は別だが、キム。この連隊がお前の面倒をみて、お前の父親のよう——あ、いや、人として叶う限り立派な人物に教育するつもりだと、その方に話しなさい」(pp.136-138)

この場面ではイギリス陣営が揶揄の対象になっていることは明白である。テキストの作動する力の方向を決定づけているのは、イギリス陣営が土地の言葉を解しないのをいいことに、彼らを小気味よく侮ってみせるキムの言語操作である。加えて、イギリス側がキムにラマ僧との旅を禁じ、彼らが自負するまっとうな社会へとキムを引き戻そうとする試みも、キムの飲んだくれの父親への言及により、その権威はたちどころに崩れ去ってしまうことになる。キムとラマ僧の「探求の旅」を自己の理解力の域外においてしまうイギリス側と、彼らの無理解を自明のこととせず、自らの旅の意義を信じてキムに説明を促すラマ僧との優劣関係は言うまでもないだろう。問題は我々読者にとって、このイギリス側の無理解がすなりと受け入れられてしまうという点である。換言すれば、ラマ僧の探求する川という、他のコンテキストに導入されたなら、おそらくは現実離れた戯言として響いてしまうだろうと予測される話をむしろ自明のことのように抵抗なく受け入れ、と同時にイギリス側にはその話が皆目理解できないという事態までも、当然のこととして了解してしまうという方向に、このテキストは読者を誘導してしまうのである。ここではインドとイギリスの間の境界線は、越えがたく明瞭である。

『キム』がキプリングの作品中、最高傑作であるという点に関しては、まず例外なく意見の一致がみられるだろうが、このテキストが高い評価を与えられた理由の如何によっては、それが帝国主義の擁護者というキプリングの悪名を容認する可能性もあり、その意味でもこの作品に関する批評は、テキスト同様、再検討の必要があると考えられる。『キム』についての「強力な読み」<sup>9)</sup>を展開したエドモンド・ウィルソンの批評に遡ると、彼はこのテキストを、キプリングが「第一級の創造的芸術家へと成長することを可能にした真摯な試み」<sup>10)</sup>

であると認めながらも、「二つの勢力は決して交わることがな」く、<sup>11)</sup>「その軋轢は真の危機という高みにまで到達することはない」<sup>12)</sup>と結論づける。こうしたウィルソンの見解は、『キム』における「アングロ・インド」とインドの関係は微塵も政治的なものではない<sup>13)</sup>、あるいはロシアのインドに対する脅威を描くキプリングの筆致は「非政治的」<sup>14)</sup>であるといった批評と軌を一にするものである。全体としては高い評価を与えながらも、『キム』は「非政治的」という表現で指摘される明らかな欠陥を内包するテキストであるとする以上のような批評に対し、比較的最近では、キム少年とラマ僧の友愛を基軸として『キム』は全編通じて喜び溢れる作品となっているという論や、<sup>15)</sup>「人種の差という障壁を乗り越えようとする非常に興味深い試み」<sup>16)</sup>がなされているという、従来の見解とは真向から対立する批評が提出されている。しかしインドとイギリス間の軋轢の欠如を、人種を越えた融合という肯定的な視点からとらえる批評に対してサイドは徹底的に批判的な立場をとり、確かに『キム』は「帝国主義がなかったなら起こりえなかったであろう」巧みな状況設定と人物造形に成功したという「厄介な小説」<sup>17)</sup>であると留保をつけはするものの、「キプリングがインドを帝国主義の不幸な犠牲と見做していたなら存在したに違いなかった」インドとイギリスの葛藤が『キム』において欠如しているのは、「イギリスに統治されることがインドにとって必然の運命であった」<sup>18)</sup>とキプリングが考えていたためであると指弾する。<sup>19)</sup>この「葛藤の欠如」に関してはラシュディーもまた、キプリングの初期のインドものでは一人の人物が抱え持つ「オリエントの少年とサーヒブの少年」としての「せめぎ合いが至る所に見られる」のに対し、それ以後書かれる『キム』では「キプリングの抑制がかなり働い」<sup>20)</sup>て、逆に面白みに欠けるとの意見を述べている。つまり『キム』をめぐる批評の争点は、「葛藤の欠如」か「和合」かという二派に大別されると思われるのである。

この両派の結論の差異はあまりにも大きすぎると言わねばならないが、それにしても「和合」はもとより「葛藤の欠如」といった概念が浮上してくる背景には、イギリスとインドの接点を見出すことが可能であるという前提が無条件に容認されていると考えてよいだろう。だが先程の引用箇所では、葛藤や軋轢といったせめぎ合いなど起こる余地もないほどに、イギリスとインドの間の距離は絶大なものではないか。どれほどキムが言葉を尽くして説明しても、イギリス側にラマ僧

の旅の意味を理解させることは不可能なのであり、だからといってラマ僧が自己の信念に懐疑を抱くようになることも、また同様にあり得ないことなのである。そのようにしてインドはインド、イギリスはイギリスという双方の存在の確立を、何やら作為的に思えるまでにインドの優越性を強調することによって可能にしようとするこのテキストの持つイデオロギーとは、それでは一体どのようなものであるのだろうか。

\* \* \*

それにしてもこれほどまでに接触の糸口を絶たれ、決裂したかに見えるインドとイギリスの双方に、キムはどのようにして関与していくことになるのだろうか。彼はインドとイギリスの全く異なる箇所へ反応し、その点においてそれぞれの関係を取り結んでいくのだろうか。

キムは「グレート・ゲーム」と呼ばれるスパイ活動の存在を知り、正式にその活動に参加する以前から既に、「インド調査局の機密書の一冊にC251Bとして登録され」(p.69)ながらイギリス政府に情報を洩らしているマーバブ・アリの使い走りや何らかの経験している。マーバブ・アリが依頼する使いには何か裏があるとうすうす感ずきながらも、彼のスパイとしての素性を知らないキムがマーバブとの関係を成立させることになるのは、キムからの働きかけというよりもむしろ、キムに備わっている他の子供にはない能力が、マーバブ・アリにとって殊のほか重要な意味を持つものであったためである。マーバブ・アリにとって

キムはいまだかつて彼に嘘をついたことのない世界で唯一の人物であった。だがそのことは、キム自身の目的や、マーバブ・アリの仕事のためなら、キムが彼以外の人間に対しては東洋人のように平気で嘘をついてみせるということをもマーバブがもし知らなかったなら、キムの性格上の致命的な欠陥となったであろう (p.71)

と説明されることからわかるように、マーバブが認めるキムの能力とは、大胆さに裏打ちされた「はしこさ」のようなものであると考えられる。キムの能力を見抜いたマーバブ・アリの目の確かさは、マーバブを疑ったインド当局が家宅捜索を行った際に、板張の壁の節穴からその様子を覗き見たキムが、「手紙や勘定書

や鞍までひっくり返すとは、ただの賊ではないし、マーバブの履物の底に横から小型ナイフで切りこみを入れたり、鞍袋の縫い目を巧みにほどいたりするところからみると、単なる強盗ではない」(p.73)とすばやく見当をつけ、自分に託された書類こそが捜索の目的であると察知して急いで立ち去るという行動によって証明される。

このように事の詳細を知らずとも、重要な本質を見抜いて機敏に立ち回るキムの能力は、ラマ僧の弟子となっても遺憾なく発揮される。世間智などという言葉がその語彙からは完全に欠如しているかに見えるラマ僧と二人での旅の道すがらに行き合う新しい事に心躍らせながらも、キムは万事に油断なく目を光らせ、要求したものは違う汽車の乗車券をつかまされそうになって抗議し、ラマ僧から金を盗もうとする司祭の奸計を事前に見破りもする。「お前は時に聖なるものようであり、時には悪魔のようであり、どちらなのか私はつくづく考えてしまう」(p.109)という発言がなされるところを見ると、ラマ僧もキムのこの能力に無知ではないようだが、当然ながら彼はマーバブ・アリのように積極的にその能力を歓迎しはしない。重要なのはラマ僧がキムの能力に気づいており、望む望まないにかかわらずその能力の恩恵を受けていながら、このテキストにおいてラマ僧は、金や食物のために騙したり騙されたりといった次元のことは一切関知せず、超越した存在であることを殊更に強調されている点である。それによってキムの一種のずる賢い能力は、スパイ活動によって表象されるイギリス側との関係において、とりわけ有効に機能するようになってしまっている。

だが実際ラマ僧との旅の道中でも、キムが彼の特権的能力を行使する機会がありえたという事実は、何の共通点も持たないと見えたインドとイギリスが、キムにとって同質のものであったということの意味するのではなからうか。イギリス側には気違い沙汰と映ったラマ僧の信仰や探求の旅を尊いものと崇め、救いを求めて膝まづく人々の祖国たるインドでもまた、裏切りや嘘を当然のこととする間諜の養成所たるイギリス陣営において珍重される能力が、同様に必要とされているのではないか。にもかかわらず、インドとイギリスの歴然たる優劣関係が生じてしまうのは、インド陣営を代表するかに見えるラマ僧の超越性が、テキストを支配する力として強調されているからである。

だがそれにしても、ラマ僧とインドの関係はそれほ

ど自明のものであったろうか。その答えは、キムとラマ僧の出会いの場面を復習してみることによって明らかになるだろう。キムは見慣れぬ服装をしたラマ僧を神仏の祭である記念館の中に案内してやるが、ラマ僧が見学を終えて出てきたあとも彼のあとを「影のようにつける。」なぜなら「この男[ラマ]の出現は彼にとって全く初めての新しい体験だったからである。」(p.60)そしてラマ僧との対話は、さらに彼の新しさをキムに確認させる。

キムはこれを聞きながら、啞然として立ちつくした。というのもキムは記念館の中で老人と館長が話すのを盗み聞きしていたので、今この老人が話していることが真実であることを知っていたからであり、真実を語るということなど、この土地のものなら、行きずりの者に対してめったにおこなわないことだからである。(p.64)

マーバブ・アリとキムの関係を可能にしている少なくとも一つの条件が、マーバブ・アリには真実を話し、彼以外の者には平気で嘘をつくことができるというキムの臨機応変な能力であったことはすでにみた。一方インドもまた、嘘や騙りという否定的特質を免れてはおらず、とりわけ行きずりの者にはめったに真実を語ったりしないことが日常化するしている国である。従って誰にでも真実を語ってしまうというラマ僧は、イギリス側にもインド側にも属さないという意味において、文字通りキムにとって「新しい」存在なのである。<sup>69</sup>それなのに何故ラマ僧はインドの表象と化してしまったのか。その絡繰の背後には、どのような力が働いていたのだろうか。

\* \* \*

キムとラマ僧の旅が、師と弟子という関係を結びながらも、出発時においては各々が別の目的を抱いていたという点は、見逃されるべきではないだろう。「それらを発見することが僕たちに課された運命ならば、みつけさなくては——あなたは川を、僕は雄牛を」(p.65)というキムの言葉で始まる二人の旅は、しかしキムに関して言えば、拍子抜けするほどにあっけなくその目的は達成されることになる。テキストの半ばにもみたくない時点で、緑の地に赤い雄牛の描かれた旗を掲げるイギリス陣営との接触を果たしたキムが、ラマ僧に向

かって「僕の探求の旅は終わりました。僕は雄牛を見つけました」(pp.135-6)と叫ぶとき、読者の心に生じる軽い失望感、おそらくこれから先果てしなく続くことになるであろうラマ僧の川の探求に比べて、今浮き彫りにされてしまったイギリス側の皮相さを、読者が心ならずも感知してしまったことと無関係ではないだろう。

問題は何かかくも念入りにインドの優位性が強調され、その結果イギリスに対する優越という点で、インドとラマ僧が結びつけられてしまうのかということである。その手がかりとなると考えられる例がある。イギリス陣営に引き取られ、学校教育を受け始めたキムはめきめきと力をつけるが、

古い名簿の隅には、彼が「不適当な人物と話をした」廉で何度か罰せられたことが鉛筆で記されており、あるときには「浮浪者[ラマ]と連れ立って丸一日学校を抜け出した」ために、ひどい罰を言い渡されたらしい(p.212)

と語り手は報告する。こうした挿話がイギリス側の偏狭な階級意識に言及し、それに比べて「全世界の小さな友」という異名をもつキムの階級横断的な友愛精神を、インド的特性として格上げしようとする意図のもとにあることは、容易に想像される。このような例をテキストの意図的操作と考えたいのは、イギリス側がキムの教育として彼に禁じたことを仮に階級的偏見と呼ぶならば、その誤謬はインドの側においても指摘されるべきものだからである。例えばキムが初めてラマ僧に出会ったときの会話は次のようなものであった。

「子供たちよ、あの大きな建物は何かね？」と彼は明瞭なウルドゥ語で問いかけた。

「アジャイブ=ゲールさ。記念館だよ！」

キムは彼に対し、ララとかミアンといったヒンドゥーやイスラムの敬称をつけずに答えた。その男の宗派が判別できなかったからである。(p.53)

さらにキムと御者との会話がある。

「俺が言いつけられたのは、お前を学校に連れて行ってことだよ」

御者は「お前」という呼称を使ったが、白人に向けてそれを用いるのは無礼な行為である。流暢で明快

この上ない土地の言葉でキムは御者の誤りを指摘すると、御者台によじ登った。(p.168)

浮浪者まがいの人物と言葉をかわしたとってキムを罰するイギリス側が、いかに表層的なことにかかわらずらわっているかがこの例から明らかになるだろう。インドでは言葉そのものの体系に、根深い階級差、人種差が組み込まれているのである。こうした政治的洗礼は、インドの深層部にまで浸透してしまっているため、純然たるイデオロギーとして抽出することはもはや不可能事なのである。それ故このテキストはキムに、イギリス側に対し尊称をつけないといった目につきにくい方法ではなく、土地の言葉を理解しない彼らを手玉にとって、「馬鹿」「間抜け」といったあからさまな侮蔑の言葉をはかせることによって、インドの言葉にある政治性を隠しながら、揶揄の対象となるイギリス側の皮相さを際立たせることに成功しているのである。

このようなテキストにおいては、バイリンガルとしてのキムの能力が、彼の特権化の重要要因となっていると一瞬みえもするだろう。が、これはこのテキスト読解の根本に関わる問題であるが、キムの言語能力のなさこそが、このテキストを成立せしめる、つまりイギリス側のスパイ活動とラマ僧の探求の旅という二つのゲームを可能にする基本条件なのである。

キムの言語/非言語能力にからむ力の作用は複雑である。ラマ僧とのコミュニケーションをはかるため、イギリス側はキムに「通訳としての任務」(p.136)をふりあてる。だが英語力の不十分なキムが、いわゆる「通訳」としての適性に欠けていることは言うまでもない。さらに読み書きの能力が皆無のキムは、マーバブ・アリやラマ僧に手紙を送るために代筆屋を頼まなければならない。このようにして通訳された言葉や代筆された文字は、「誤読」<sup>16)</sup>と密接な関係がある。キムにおける「誤読の才能」は、他の例によっても証明可能である。イギリス側の要請により、ラーガン・サーヒブのもとヘスパイとしての訓練を受けに行ったキムは、そこでラーガンを慕うもう一人の子供と一緒に宝石を使ったゲームをする。トレイの上に置かれた何種類もの宝石を記憶し、互いの記憶力を競うというそのゲームでは、「青い石が五つ——大きいのが一つとそれより少し小さいのが一つ、あと小さいのが三つ...緑の石が四つと穴のあいてるのが一つ」(p.204)といった拙い答え方をするキムに対し、すでにこのゲームには通じており、「瑕のあるサファイアが二つ、一つはニルティでもう一つは四ルティ

ぐらいの重さのもの。四ルティのサファイアは角が欠けている。黒い縞のある平たいトルコ石が一つ...」(p.205)と得意気に答えるもう一人の子供の圧勝に終わる。つまりキムは、ある宝石を指し示す固有の名前で、その宝石を提示することができないのである。

宝石に限ったことではない。「明日前戦に向かうために、アムバーラで我が軍は汽車に乗るようにとの指令を受けている」という発話に対し、「『前戦』や『軍が汽車に乗る』といった言葉を初めて耳にし」たキムは、「何だって？」(p.145)と問い返さねばならない。こうしたシニフィエとシニフィアン的一致をみない彼の言語行為を「誤読の才能」と呼びたいのは、彼の語彙不足、あるいは再現=表象の能力の欠如こそが、スパイとラマの弟子という二つの役割の遂行に、大きく寄与しているためである。例えばキムはマーバブ・アリに「白の種馬の血統書」をある人物に届けるよう頼まれるのだが、彼に渡された書類が「白の種馬の血統書」などといった代物ではまるでないことを直感したキムは、その書類を大事に守って無事に使いを果たす。あるいはキムが代筆屋に書かせたラマ僧宛ての手紙は、クレイトン大佐を感心させもする。

「ではそのお師匠様とやらにあてた手紙の中で、お前は どうして私の名前を省いたのだ？」と、大佐は奇妙な笑いを浮かべて言った。キムは思い切っ てこう答えた。

「どんなことを書くにしても、関係ない人の名前を書くのはいいことじゃあない、名前を挙げると [by the naming of names]、上手く計画されたものが混乱してしまうことがよくあるからって、前に言われたことがあるんです」

「よく仕込まれているようだな」という大佐の言葉に、キムはさっと顔を赤らめた。(p.164)

あるシニフィアンが通常指し示すはずのシニフィエとは違った、全く恣意的とすらみえるシニフィエを持つ語に敏感に反応すること。これこそがキムの特権的能力の果たせる技なのである。だから、宝石の名前を学ぶことや、戦の用語を覚えること、ラマ僧の用いる特別な宗教がらみの言葉を知ることなどは、スパイやラマ僧の弟子たる者としての絶対条件に一見思われもするが、このテキストにおいては二次的なことにすぎないのである。二次的というのは、ラマ僧との探求の世界においても、スパイ活動の世界においても、そこ

で使用されるシニフィアン—シニフィエの対応が明確な言葉は、ほとんど意味のないパターン化された言辭にすぎないからである。それ故、僧の変装をして「グレイト・ゲーム」に参入したキムは、行きずりの巡礼者に宗派を問われて、「私もまた探し求める者なのだ」と「ラマ僧の度々口にする言葉の一つを使う」(p.234)だけで易々と僧の役割を演じてしまうことができるし、過去の誤ちを思い出して悲しみにくれるラマ僧を慰めようとするあまり、キムが「願わくば我が身を汝を救わせたまえ」と、こともあろうに「マーバブ・アリのお得意の言葉をつい口にし」(p.309)てしまっても、それが場違いに響くこともなく、まかりとおります。その程度の意味のない言葉であることが、ここで露呈されてしまうのである。

従ってキムの非言語能力というときには、スパイの世界とラマ僧の探求という二つの世界で流通する、限定された言語を対象にしているのではない。二つの世界の外側にあつて、その存在ゆえに、世界の内部におけるキムの特権的言語能力——言葉の指示しないものを読み取る力——を可能にせしめているものごとを言うのである。このことにおそらくラマ僧は気づいている。そしてこの点においてラマ僧は、気づいていないイギリス側よりも真の意味で優位に立つのである。だがそれならば、ここでまたテキストの策略に行きあたることになる。というのも、ラマ僧という人物は、およそ自らの探求の旅以外のことには何一つ気づかない人物、一切のことを超越して遠く彼方を見つめている醇乎たる魂の持ち主として、このテキストで描かれていたのではなかったか。何故ならば、ラマ僧の超越的無知が、知り尽くすことを本業とするイギリス側のスパイ活動に対する優越的特質として機能するものであり、その優越性の余波は、インドにも及ぶものだからである。無知はこのテキストでは優越の象徴なのである。キムを学校に幽閉しようとしたように、無知に対し有無を言わせぬ権威でもって干渉するのは、常にイギリス側なのである。だがすでに証明したように、ラマ僧とインドの関係は、決して必然的なものではなかった。そしてインドがまた嘘や騙り、階級差、人種差などという悪意ある現実を知悉していることもみた。よって次に検討しなければならないのは、ラマ僧の特性としての無知である。ラマ僧の「知」に無知であろうとするこのテキストが提示しようとするもの、あるいは隠蔽しようとするものとは一体何であるのだろうか。

\* \* \*

およそ暗さや陰鬱さというものが、このテキストの表面から一切払拭されているように見えるのは、期間の定かならぬ旅においても、生命を賭したスパイ活動においても、そこにある負の要素など指摘するのも愚かしいほどに、「他者になることに喜びを見出す」<sup>17)</sup>柔軟な心性と相まって、常に「新しい事」を渴望するキムの若くみずみずしい生命力がテキストの前面に吹き出し、「ダイヤモンドのようにきらきらと輝く暁」(p.121)のごとく、まだ醒めやらぬインドの大地に新しい未知の日の訪れを一刻もはやく告げようと、歓びの光となって煌めきわたっているがためであろう。その清澄な光の中で、とりわけキムとラマ僧の関係は美しい。それは一つには、二人の口から何度も洩れる、「お前は私の弟子だ」「僕はあなたの弟子です」という支配/従属の構文中の「弟子—*chela*」という斜体字で記される言葉が、「友」とも「愛する者」とも置き換え可能に響くためであり、その寛大な愛が、このテキストには現前しないけれど、見えない部分に暗く澱むイギリス—インドの支配/従属の言説の確たる存在ゆえに、かえって引き立てられてしまうためである。

ここで問わねばならない疑問がある。キムの特権的能力をきっかけとして生じる関係のネットワークにおいて、キムは例えばマーバブ・アリに対しては、彼の言う「白い種馬の血統書」を、「機密事項」と読み、旅の道中キムとラマ僧が出会った司祭の一夜の宿を提供しようという友好的言辭を、ラマ僧の持金を騙し取ると読み換えた。それではキムはラマ僧の言葉を、どのように読み換えているのだろうか。彼のよく使う「求道者」や「輪廻から逃れて、川で罪を洗い流す」といった、イギリス側には気遣い沙汰としか読めなかった言葉を、キムはどう読んだのか。マーバブ・アリや司祭の言葉を的確に読むキムの能力は、ラマ僧の謎めいた言葉に対しても同様の冴えをみせる。キムの答えは明快そのものである。「僕はあなたの弟子です」と。

キムとラマ僧のつながりが決定的に美しいのは、支配/服従という政治的関係を友愛に転化させてしまうほどの過激に暴力的な欲望がそこに介在しており、その欲望の世界に向けて彼らが自他の区別の無効化をも恐れぬまでに、自らを投げ出し、委ねきっているからである。学校での教育を終え、戻ってきたキムにラマ僧は言う。

緑の地に描かれた赤い雄牛——私はそれを忘れはしなかったよ——が、お前に誉れをもたらすという運勢が、お前の星に現われていた。その予言が実現されたのを見たのは、他でもないこの私ではなかったか。そうだよ、私はお前の道具だったのだ。だから今度はお前が私の道具となって、私のために川をみつめてくれないとかならない。そうすれば探求の旅は必ず達成されるだろう！(p.277)

自己の探求を達成するためにキムに自分の道具になれという、これほどあからさまなエゴイズムの言葉を口にした者が、このテキストにおいて他にいただろうか。キムをスパイの一員 [chain-man](p.166) に養成しようとするイギリス側でさえ、これほど露骨な表現を使いしなかったはずである。それを言うなら、ラマ僧が始終口にし、それがあたかも彼の超越性の証左のようにも思われている、「私はその川で私の罪を洗い流したい」という言葉も、彼自身の欲望をストレートに言い放ったものではないか。

だからこの言葉にそれが意味するものとは違ったシニフィエを探する必要はないのである。何故ならば、この大胆すぎるほどに率直で、あまりにも自己中心的な欲望を表出するこれらの言葉は、キムそのものだからである。「道具」となるのはキムだけではないことを忘れてはならない。キムがラマ僧との旅を始めた直接の理由は、それが「新しい事」に対する彼の欲望を満たしてくれると思われたからであり、また赤い雄牛を探せという彼の父親の予言めいた命令の言葉をも、同時に遂行する格好の機会であったためである。従ってキム自身がラマ僧の欲望の対象である川そのものなのであり、さらに言えば、ラマ僧の欲望の反映されたキムは、ラマ僧その人なのである。だからこそ彼ら二人の野蛮なまでにむきだしの欲望は、豊かな川の流れや新しい喜びに満ちあふれる他者という広大な世界を背後に従えた、自我のない無垢なものへと変貌をとげるのである。

キムはラマ僧を通して、その向こうにある何か「新しい事」に憧れ、ラマ僧はキムを媒介として川をみつめようとする。換言すれば、彼ら二人がそれぞれ同様に抱いている願望とは、自分ではない何かになり変わることなのである。彼らが目的を一にしていること、彼らがそれぞれに持つ自己の願望のシニフィエが、互いを指し示していたことが、キムとラマ僧の完結した世界を形作る。よってスパイ活動において発揮する特

異な能力や、変装の巧みさゆえにキムについて通常指摘されるところの「自己消去」<sup>(18)</sup>の能力、あるいは「ネガティブ・ケイパビリティ」<sup>(19)</sup>は、ラマ僧にとっての夢でもあり、このことはラマ僧もまた「グレート・ゲーム」に無関係でなかったことを例示するものである。<sup>(20)</sup> 思い出したいのは、キムの学校教育の件については、ラマ僧の承認も求められていたという事実である。イギリス側とラマ僧が初めて出会ったあの場面で、ラマ僧はキムの教育費に関して「交渉」<sup>(21)</sup>したのではなかったか。キムを学校にやることは、キムとラマ僧の二人の探求の旅を事実上中断させることになるのだが、それが二人の仲を裂くものではないことを、ラマ僧は知っている。だからラマ僧が教育のために支払う金は、キムの存在によって初めてラマ僧が実現することのできる「他者になり変わる夢」のための代償に他ならないのである。そしてその夢の保障のためにラマ僧が為さねばならなかったもう一つのことが、インドの表象と化すことなのである。つまり他者になり変わるという夢の時空間を得るためにラマ僧は、インドとイギリスの対立とその間を揺れ動くキムという、このテキストが志向する政治的イデオロギーとの折衝を果たさなければならなかったのである。別言すれば、このテキストはインドとイギリスという明確な対立項に頑として支えられていたものであり、インドにもイギリスにも属さないラマ僧は、あえてインド側を引き受けることによって、キムとの旅の時間を得ることが可能になったのである。ラマ僧の「知」に触れれば、自らのイデオロギーを露呈することにもなりかねないこのテキストが、徹底してラマ僧の無知を強調する必要があったゆえんである。

だがこのラマ僧の夢の時間には限りがあるだろう。キムとラマ僧の他者になり変わるという願望が、すでに見たように自己の願望のシニフィエを探す旅であったとしたなら、キムがそのシニフィエを発話するに足る言語能力を獲得したときこそが、ラマ僧の夢の潰えるときでもあるのだから。だからあるシニフィエの指示するものとは全く別の恣意的なシニフィエを持つ語のみに鋭く反応するという特権的言語能力だけをキムが維持している限り、ラマ僧の夢の世界は存続し、と同時にそれはスパイ活動の世界の存立にとっても必要な条件なのである。何故なら、インドで育った自己と、イギリス側のスパイとしての自己という、引き裂かれたアイデンティティにキムが懐疑を抱きはじめたならば、おそらく彼のスパイとしての傑出した能力はたちどころに崩れ去ると思われるからである。それ故、未

だシニフィエに到達する能力を欠いたまま、それでも彼が「キムとは誰なのだ?」という問いを発し始め、その頻度が徐々に増して、やがては「僕はキムだ。僕はキムだ。だがキムとは誰なのだ?」と「何度も繰り返し」(p.331) たたみかけるように問うとき、インドとイギリスの対立項を強要するテキストのイデオロギーを隠すかのごとく打ち立てられたような、ラマ僧との探求の旅とスパイ活動という、共にキムの積極的な喜びに溢れた夢の世界が、近い将来霧消するであろうことを予感させずにはおかないのである。そしてラマ僧は自己の夢の世界に終わりがくるであろうことに意識的であり、イギリス側はキムに言語教育を施そうと学校行きを強いるほどに、キムの言語能力に仕掛けられた絡線に無知であるという点で、このテキストでは常にその皮相さによって記憶される存在と墮してしまうのである。そしてこのことに意識的であるからこそラマ僧はキムに

セント・ザビエルでの生活の細部について問うことは一度もなかったし、イギリス人の習慣、作法に対しても、些かの興味も示さなかった。彼の心は全て過去に向けられており、両手を擦り合わせ、くっくくと笑いながら、二人で共に出かけたあの素晴らしい最初の旅での一コマコマを懐かしげに思い起こしながら、ついには満足気に年老いた身体を丸めて横になり、唐突に眠りに入るのであった。(p.241)

それだから我々は、ある日不意にキムの口をついて次のような言葉が嗚咽まじりに洩れてきたとき、胸を衝かれるおもいがするのである。

「僕はあなたをあまりに歩かせすぎた。僕はあなたのために、いつでもよい食物を選んだわけではなかった。僕は暑さがあなたにとってどれほどこたえるか考えなかった。僕は道で立ち話をして、あなたをその間一人ぼっちで放っておいた…僕は——僕は——だけども僕はあなたを愛しています…でももう遅すぎるんだ…僕はあまりに子供だった…ああ、どうして僕はもっと大人でいられたのだろうか…」(p.320)

こんな言葉を一体キムはどこで習い覚えてしまったのか。これほどまでに一心に他者のために向けられた、他者への愛だけに衝き動かされた言葉は、スパイの世界にも、ラマ僧との旅の世界にもなかったはずである。そ

してもこの場面が感動的であるとするなら、それは常に自己の欲望だけを見つめて一目散に駆け出していたキム少年の精神が、いつのまにかこんなにも老いてしまったこと、特権的能力のおかげで常に自信に溢れていたキム少年が、他者を愛することで人が初めて知る自己の無知無力を学んでしまったこと、この成長の軌跡をここでわれわれが目あたりにすることになるからではなからうか。

キムとラマ僧のシニフィエを求める旅とは、だから、キムの特権的能力の有効であった二人のユートピア的世界と、その外部にあるアイデンティティをめぐる言説の世界の、まさに境界線上の旅であったといえよう。そしてこのテキストが、自らのイデオロギーを隠蔽するために設定した、スパイ活動とラマ僧の探求の旅といった夢の空間においては、適切な語彙が不足しても、文字が書けなくても、どれほど間違った翻訳がなされようと、キムの代筆させた手紙を受け取っては、マーバブ・アリが駆けつけ、ラマ僧もまた、時には「南の地域から」、時には「雨の多い緑豊かな西の地方から」、「あるときには北から」(p.213) キムを訪ねてやってくる。正確な言葉が欠けていても、彼らの繋がりが切れることはないのである。別言すれば、これらの世界には、メッセージを伝えるための誤った言葉、不必要な言葉が溢れかえっているのである。

こうした過剰な言葉は、逆にこのテキストにおいて語られない言葉の持つ意味の大きさを意識させる。「男性によって形成される小説」<sup>(22)</sup>「男性同士の文化を越えた繋がりの物語」<sup>(23)</sup>であるこの『キム』というテキストにおいては、否定的役割を担わされたある女性の登場人物の特徴は、「お喋り」(p.320)なことである。一方、秘密と切っても切れない関係にあるスパイ活動や、瞑想が習慣のラマ僧の世界とは、語らないことを是とする男の世界である。確かに「ステンド・グラスに描かれた若き聖者」(p.243) さながらに成長するキムにユニセックス的側面のあることは否めず、また痩せた身体に布を「幾重にも巻きつけた」(p.52)ラマ僧に独特のエロティシズムを感じることは不可能ではない。だがここでより重要なのは、「語らないこと」をよしとする男たちの世界を描くこのテキスト自身、語ることを潔しとしないという特性を備えているという点である。

それは具体的には、キムの学校生活に関する描写に当てはめることが可能だろう。白人少年の集団にどうしても馴染めないキムの訴えに対し、マーバブ・アリもヴィクター神父も聞く耳を持たない。テキストの途中



から顕在化する語り手すら、「あなた方は海へ行ったことさえほとんどないに、三百人の早熟な少年たちに混じってのセント・ザビエルでのキムの経験などには、およそ興味などないでしょう」(p.171)と、説明を省いてしまう。そして「奴らは僕のことを殴るだろう」(p.162)というキムのぼそぼそとつぶやく声は、悪意ある少年たちの喚声に消されてしまうことになる。だが、勇気と知恵にあふれた活動的なキム少年が、「白人集団の中で感じる強烈的な孤独感」(p.151)こそが、遠くチベットの地からインドに一人旅してきたラマ僧が、<sup>(2)</sup>そこで他者として感じた孤独に通底するものではないだろうか。「孤児として」のキムに「起源がない」<sup>(3)</sup>とするならば、チベットの僧でありながら、その出自に殊更に言及することなくインドの表象と化していくラマ僧は、このテキストのイデオロギーが強い孤児であるだろう。だからこそ、互いを道連れとして旅するキムとラマ僧は喜びに溢れている。いかにもインド的と思わせる鮪詰めの汽車、独特の不気味さを持つ宝物庫、これらに宿る生命力や躍動感、呪物的な力は、イギリスを意識したインド的描写というよりも、やがて別離の運命にあるキムとラマ僧が、共にあることの喜びを刻み込んだ数々の思い出として、いずれは回顧されるためのものではないのか。丘にあっては平地を望み、平地にあっては丘を望む二人の旅路は、彼らの生き方そのものであり、二人の住まうユートピア的空間にあっては、彼らの前に果てしなく広がる乾いた道は、彼らが歩く足下から、豊かに湧き出る川と化すことだろう。

この道の果てにあるものが何であるのか、テキスト内で分節化されることはない。それは「キプリング自身、キムの行く末がわからない」<sup>(4)</sup>からではない。キムが川そのものであることをラマ僧が知り、自分が無力であったことにキム自身が気づく。ここにおいてエンディングに持ち込まれるのは、この発見がテキストの目的であったからではなく、このつねにすでにそうであった事実の露呈により、ラマ僧とのユートピア的世界と「キム自身がグレート・ゲームそのもの」<sup>(5)</sup>であったスパイ活動の世界が壊れ去ったあとで、その先にあるのは死のみだからである。いつか「キムは殺されなければならない」<sup>(6)</sup>運命にあることを、テキストは知りつつ黙っているのである。そして二人の孤独を隠すからこそ、このテキストは二人の喜びを殊のほか輝かせもするのである。

インドとイギリスの絶対的対立というテキストの志向するイデオロギーは、それを隠蔽するかのごとく、そ

のどちらもがキムにとっての喜びの場となるユートピア的空間と化す。そしてインドのイギリスに対する優越性は、あくまでも政治的枠組の中で政治性を越えたかに見える自己滅却を提示するために必要とされた、テキストの策略であった。だがこのテキストで描かれるインドの「本質的で変わることのない特性」が、キプリングの「故意にインドをそのように見た」<sup>(7)</sup>イデオロギー操作の結果であるとしても、そこにはあらゆる政治性を越えて、他者になり変わることができるという夢を持続させてくれる「時のない」<sup>(8)</sup>領域に対する悲願のような思いが込められているのであり、しかしラマ僧の夢の空間には期限があったように、それが夢ではないことを熟知し、かなわぬ夢に思いをはせたことを恥じる作者の心の葛藤に気づくとき、このテキストで前景化される「広漠とした灰色の不定形のインド」(p.143)という国がその背後にたたえる、深く静かな悲しみが、垣間見られるように思われるのである。

## 註

- (1) Rudyard Kipling, *Kim* (Harmondsworth: Penguin, 1989), p. 52. 以下このテキストからの引用は全てこの版に拠るものとし、本文中に頁数を記す。なお引用中の「……」は中略を表す。
- (2) 『キム』における風景描写に関しては、Alan Sandison, "Introduction" in *Kim*, by Rudyard Kipling (Oxford & New York: Oxford University Press, 1987), pp. xvi, xxvii. 参照。
- (3) Sara Suleri, *The Rhetoric of English India* (Chicago and London: University of Chicago Press, 1992), p.114.
- (4) Edmund Wilson, "The Kipling that Nobody Read" in *Kipling's Mind and Art*, ed., Andrew Rutherford (Edinburgh and London: Oliver & Boyd, 1964), p.28.
- (5) *Ibid.*, p.29.
- (6) *Ibid.*, p.28.
- (7) Alan Sandison, "Kipling: The Artist and the Empire" in *Kipling's Mind and Art*, p.160.
- (8) Mark Kinkead-Weekes, "Vision in Kipling's Novels" in *Kipling's Mind and Art*, p.227.
- (9) Irving Howe, "The Pleasures of *Kim*" in *Rudyard Kipling*, ed., Harold Bloom (New York, New Haven, Philadelphia: Chelsea House, 1987) 参照。
- (10) Abdul R. JanMohamed, "The Economy of Mani-

- chean Allegory: The Function of Racial Difference in Colonialist Literature," *Critical Inquiry* 12 (Autumn 1985), p.74.
- (11) Edward W. Said, "Introduction" in *Kim*, by Rudyard Kipling (Harmondsworth: Penguin, 1989), p.45.
- (12) *Ibid.*, p. 23.
- (13) エドマンド・ウィルソンとサイドの『『キム』における葛藤の欠如』という指摘に対してサーラ・スレーリは、「帝国の不安が、小説で描かれるモデルとしての葛藤にすぎないもの——といってもそこですら政治的葛藤が熾烈に行われているわけだが——を抑圧するという形で現われているとするならば、キプリングの葛藤を回避した記述は、帝国がその絶対的単一の権力を誇る際に必然的につきまとう曖昧さを、彼が鋭く見抜いていたという事実を示すものに他ならない」との疑義を提出している。Suleri, p.115.
- (14) Salman Rushdie, *Imaginary Homelands: Essays and Criticism 1981~1991* (Harmondsworth: Penguin, 1992), p.74.
- (15) アンガス・ウィルソンは、インドを表す宗教として仏教の選択は奇妙である、というK. ジャミルディンの指摘を引いている。  
Angus Wilson, "Kim and the Stories" in *Rudyard Kipling*, ed., Harold Bloom, p.33.
- (16) Suleri, p.121.
- (17) JanMohamed, p.78.
- (18) Thomas Richards, "Archive and Utopia," *Representations* 37 (Winter 1992), p.114.
- (19) Kinkead-Weekes, p.217.
- (20) Suleri, p.119.
- (21) *Ibid.*, p.120.
- (22) Said, p.12.
- (23) Suleri, p.120.
- (24) Thomas Richardsによると、西洋の神話では、チベットはエントロピーや損傷、破壊の危険に常に曝されて枯渇した知力を回復するための療養地と見做されている。Richards, p.104.
- (25) JanMohamed, p.78.
- (26) Martin Seymour-Smith, *Rudyard Kipling: The Controversial New Biography* (London: Papermac, 1990), p.313.
- (27) Suleri, p.116.
- (28) *Ibid.*, p.130.
- (29) Said, p.9.
- (30) Suleri, p.114.